

〈知的障害教育〉

自己効力感を育む学習活動の工夫

— 自立活動の視点を踏まえた感覚統合遊びを通して —

与那原町立与那原東小学校教諭 宮 城 美奈子

I テーマ設定の理由

令和2年度より全面実施された『小学校学習指導要領（平成29年告示）』では、学校教育において「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくこと」が求められている。また、中央教育審議会初等中等教育分科会「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（平成24年7月23日）では、「障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである。その場合には、それぞれの子どもが、授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていけるかどうか、これが最も本質的な視点であり、そのための環境整備が必要である。」と示されている。共生社会の形成に向けて、障害のある子どもの自立と社会参加を見据えた力を育てていくためには、交流及び共同学習の充実が求められている。

与那原町立与那原東小学校には、知的特別支援学級が3学級設置されている。本研究で対象とする学級には、男子5名女子2名（3年生1名、4年生3名、5年生3名）が在籍している。優しく素直な性格の子が多く、特別支援学級の気心知れた友だちの中では、授業で積極的に発表を行い、休み時間も自ら友だちと関わり遊ぶ様子が見られる。その一方、交流学級の授業では、学習活動に取り組むことなく時間を過ごしている、学習の場を離れて皆と違うことをしている等、意欲的に参加することが難しい現状がある。また、学校生活全般においても友だちとの会話や自分から働きかけることが少なく、各種活動において主体的に参加する態度があまり見られない。その理由として、自分にはできないという諦めや自信のなさ、不安な思い等があることが窺える。こうした自己効力感の低さは児童が持つ障害の特性による不器用さや学習内容の定着の困難さ、コミュニケーションの苦手さ等に起因しているものと考えられる。児童の苦手さを軽減させるとともに、自分にもできるという自己効力感を育む学習活動を工夫することが必要である。

苦手さの軽減のためには、障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目指した自立活動の視点を踏まえた感覚統合遊びが有効であると考えられる。佐藤和美（2015）は「不器用な子どもたちの発達を促すためには、（中略）つまづいているところを見極めながら基礎の感覚を鍛えることが大切」と述べている。子どもたちの身体の動きや学びの発達には様々な力や感覚が必要であり、それらをうまく整理・分類することを繰り返して子どもたちは成長していくといわれている。感覚統合遊びは、全身を使った楽しい遊びや活動を通して心身の発達を促すことができるため、知的障害がある子どもたちにとって取り組みやすく、個のニーズに合った様々な感覚を養うことができる。できることや得意なことを増やしていくことは、成功体験を積み重ね、自信が付き、自己効力感を育むことにつながる。と考える。

以上のことから本研究では、子どもたちの自己効力感を育む学習活動の工夫として、自立活動の視点を踏まえ、学習上、適応行動上の困難さを改善する感覚統合遊びを取り入れた指導を行う。遊びを通して必要な感覚を統合し、達成感や自信を得ることで、自己効力感を育むことができるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

- 1 自立活動の指導において、個のニーズに応じた感覚統合遊びを行うことにより、「できた」喜びや「できる」自信を積み重ね、自己効力感を育むことができるであろう。
- 2 「招く交流」において、自信をつけた感覚統合遊びを取り入れることにより、主体的に参加し、自己効力感を育むことができるであろう。

II 研究内容

1 自己効力感

自己効力感とは、カナダ人の心理学者アルバート・バンドゥーラが 1977 年に提唱した概念で「自分にはこのような行動が、この程度できる」という見込みや「やる気になればなんでもできる」と自分の能力を信じる感情のことをいう。小田（2002）によると、学校教育では、学業達成場面において自己効力感を高めることは、学業の成績と動機づけに大きな影響を及ぼすことが明らかになっている。また、戸ヶ崎（2002）によって、適切な対人行動ができるというように社会的スキルの自己効力感が向上すると、実際の社会的スキルも向上することが報告されている。バンドゥーラとシャンク（1981、1985）は、自己効力感の向上につながることで、身近な小さな目標を立てること、自分で目標を設定すること、学習の成功をフィードバックする際は「よく頑張っている成績をとったね」のように努力と結び付けて言われるよりも、「君はこの課題が得意なんだね」のように能力と結び付けて言われるほうがよいことを明らかにしている。

本研究では、児童の自己効力感の変容を見るために、東京家政大学の福井らが開発、標準化した「児童用一般性セルフ・エフィカシー（自己効力感）尺度」（こころネット）や本人と担任からの聞き取りをもとに考察を行う。

2 自立活動の指導

自立活動は、特別支援学校の教育課程において特別に設けられた指導領域である。『小学校学習指導要領』では、特別支援学級において特別の教育課程を編成する場合に、「障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るため、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第7章に示す自立活動を取り入れること。」と示されている。心身の調和的な発達の基盤に着目して指導するものが自立活動であり、自立活動の指導が各教科等において育まれる資質・能力を支える役割を担っているとされている。

自立活動の指導は、自立活動として授業時間を特設し、定期的に指導を行う場合と、各教科等の指導や生活の中で機会を捉えて指導する場合の2通りの指導形態がある。幼児児童生徒一人一人の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に即して指導を行うことが基本で、的確な実態把握を基に指導すべき課題や個別の指導目標、具体的な指導内容を定めた個別の指導計画を作成し、それに基づいて指導を展開しなければならない。また、自立活動の内容は、「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の6つの区分に分かれており、それぞれの区分の下に3～5つの項目が示され、全部で27項目ある。個々の児童の実態に応じて必要な項目を選定して取り扱うものとされている。

本研究では、児童の実態把握を基に全員の自立活動「流れ図」を作成し、共通する指導内容から活動内容を設定し取り組む。

3 感覚統合遊び

中尾(2013)は、「人間の発達過程で脳が内外からたくさんの刺激を有効に利用できるよう、効率的に組み合わせることを『感覚統合』と言い、脳に送られてくる様々な情報を統合する力があるから、外界の状況に対して適切に反応をすることができる」と述べている。エアーズ(1979)は、

感覚が統合される過程を表1のようにまとめている。学校生活で求められる教科学習能力や集中力、自己抑制等はそれ以前の感覚入力統合の上に成り立つという感覚統合の発達過程を示したものである。

表1 感覚行動発達モデル（中尾繁樹 2013年）

感覚	感覚入力統合			最終産物
	第1段階	第2段階	第3段階	
聴覚 前庭感覚 固有感覚 触覚 視覚	目の動き 姿勢 バランス 筋緊張重力への安定感 吸う 食べる 母と子のきずな 心地よい触覚	身体知覚 身体両側の協調性 運動企画 活動レベル 注意の持続性 情緒の安定性	話す能力 言語 目と手の協調 視知覚 目的行動	集中力 組織力 自尊心 自己抑制 自信 教科学習能力 抽象的思考と推理力 身体と脳の両側の特殊化

感覚統合遊びは、全身を使った遊びや活動で発達を促し、子どもたちがスムーズに生活できるように、触覚や身体の動き、力の入り具合を知る感覚等がよく働くようにするものである。

本研究では、日本感覚統合学会が開発、標準化してきた感覚統合に関する検査の一つ「J S I - R (Japanese Sensory Inventory Revised)」や児童と担任への聞き取りを基に、児童に必要な感覚を確認し、発達を促すために感覚統合遊びとして自立活動の中に取り入れる。

4 交流及び共同学習

交流及び共同学習とは、特別支援学校や特別支援学級に在籍する障害のある児童生徒と、障害のない児童生徒が学校教育の一環として活動をともにすることである。「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」では、「交流及び共同学習は、障害のある児童生徒にとっても、障害のない児童生徒にとっても、共生社会の形成に向けて、経験を広め、社会性を養い、豊かな人間性を育てる上で、大きな意義を有するとともに、多様性を尊重する心を育むことができる。」と示されている。また文部科学省「交流及び共同学習ガイド」（平成31年3月）では、「交流及び共同学習は、相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があり、この二つの側面を分かちがたいものとして捉え、推進していく必要がある。」と示されている。佐藤ら(2021)は、小学校等で盛んにおこなわれている交流及び共同学習の形態である支援学級の児童が通常学級の教科の授業や行事等に個別的に参加する「行く交流」が支援学級の子どもの「生きる力」と「自立と社会参加」に結びついているのか、通常の学級の子どもの「豊かな人間性」を育む学習になっているのかという疑問を抱き、交流及び共同学習のもう一つの形態として、支援学級の児童が自信を持って取り組める活動に、通常学級の児童を招いて参加してもらう「招く交流」の良さに着目している。

本研究の後半では、支援学級の児童が安心して活動できる交流及び共同学習として、休み時間に通常学級の友だちを招待し、自立活動の中で慣れ親しんできた感覚統合遊びを共に楽しむ「招く交流」を実施する。自立活動を通して身に付けてきた様々なスキルを通常学級の友だちとの遊びの中で活かし、交流及び共同学習や学校生活全般の充実を図る機会としたい。

Ⅲ 指導の実際

1 児童の実態把握（5月）

(1) 聞き取り（児童・担任）と授業観察

児童、支援学級担任及び交流学級担任への聞き取りと授業観察、個別の指導計画を基に、対象児童7名の学校生活における得意なこと及び困難を把握した。共通する課題として、板書を写すことや文字を書くこと、ボール運動等に困難さがあり、目と手の協調に課題があることが

考えられる。学校生活全般において、苦手なことや難しいことへの取り組みを渋る児童、相手の気持ちを考えることが難しく友だちを傷つける言動が見られる児童、自分の気持ちを伝えることや気持ちの切り替えが苦手な児童がいる。どの児童も友だちとの関わりや集団参加において課題があり、対人関係スキル等の社会性を高めることも必要である（表2）。

表2 児童の学校生活における得意なこと及び困難（A児を抽出）

	得意なこと	学習や運動の困難	社会性の困難
A児	<ul style="list-style-type: none"> 活動の手順や見通しが持てると自分で取り組む。 興味を持ったことは、続けて取り組む。 友だちが困っていることに気がつくと優しくする（学習用具を貸す等）。 人前で積極的に発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 筆圧が強い。マスに字を入れて書くこと。字形の整った文字を書くこと。 文字を書き写すこと。 力加減の調節。消しゴムで文字をきれいに消すこと。 リズム感が弱い。曲に合わせて踊ること。 縄跳びでリズムよく跳ぶこと。 ボールを捕ったり、投げたりすること。 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びのルールや勝敗の理解。 順番を守ることや待つこと。 相手の気持ちや場の状況を理解すること。 会話のやりとり。 ASDの診断あり。

(2) 児童用一般性セルフ・エフィカシー（自己効力感）尺度（以下、GSESC-R）の実施

GSESC-Rは、小学校3年生以上の児童・生徒を対象として個人の一般的なセルフ・エフィカシー認知の高低を測定するために標準化された質問紙である。18個の質問があり、大きく「チャレンジ精神」と「安心感」の2因子から構成されている。本学級児童の中には、文章を読んで内容を理解することが困難な児童もおり、自分で質問紙に回答することが難しい児童については、教師が質問を読み、言葉の意味について補足説明を行いながら回答を行った。表3はその結果である。D児を除く全員に自己効力感の低さが見られた。

表3 GSESC-Rの結果（令和5年5月実施）※G児未実施

	安心感	チャレンジ精神	自己効力感（総合得点）
非常に高い			
高い傾向にある	C児		
普通	D児、E児	B児、D児	D児
低い傾向にある	A児、B児、F児	A児、E児	A児、B児、C児、E児
非常に低い		C児、F児	F児

質問別に見ると「2. なにかをするとき、うまくいかないのではないかと心配することが多い。」「9. ひっこみじあんなほうだ。」「16. 目標を立てても、その通りにできない。」「17. 友だちよりもものごとをたくさん覚えることができる。」の項目で、自己効力感が低い回答をした児童が5名ずついた。不安や自信の欠如、活動への消極的な姿勢が窺える。

(3) JSI-R (Japanese Sensory Inventory Revised) (以下、JSI-R) の実施

この検査は、発達障害児を対象とした感覚統合検査の一つである。感覚刺激の受け取り方に偏りがある場合、日常生活における様々な行動に表れてくることがあり、このような行動の出現頻度を調べることで、子どもの感覚刺激の受け取り方の傾向を把握しようとするものである。感覚機能に関連すると思われる147の行動項目から構成されており、結果は3段階評価で解釈できるように作成されている。3段階評価尺度は表4の通りである。

表4 JSI-R評価尺度（日本感覚統合学会）

Green	典型的な状態（健常児の約75%に見られる状態）
Yellow	若干、感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態（健常児の約20%に見られる状態）
Red	感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態。すなわち、ある刺激に対して過敏であったり、鈍感であるような状態（健常児の約5%に見られる状態）

本検査は、担任と保護者に依頼して実施した。表5がその結果である。感覚刺激の受け取り方は典型的な状態にある児童が多かったが、固有受容覚と聴覚、視覚で偏り傾向が推測される児

表5 JSI-Rの結果（令和5年5月実施）※G児未実施

	Green	Yellow	Red
前庭感覚	A児、B児、C児、D児、E児	F児	
触覚	A児、B児、C児、D児、E児	F児	
固有受容覚	B児、C児、D児、F児	E児	A児
聴覚	C児、D児	A児、B児、E児	F児
視覚	B児、C児、D児、E児	A児、F児	
嗅覚	A児、B児、C児、D児、E児、F児		
味覚	A児、B児、C児、D児、F児	E児	
その他	B児、C児、D児	A児、E児	F児
総合点	A児、B児、C児、D児、E児	F児	

童が複数いた。特に、聴覚に偏りのある児童が多く視覚支援の工夫が必要である。

(4) 自立活動「流れ図」で個別の指導目標・指導内容の設定

(1)～(3)の実態把握を基に全員の流れ図を作成し、中心的課題を導き出し、自立活動における個別の指導目標、指導内容の設定を行った(表6)。流れ図の⑦は具体的な指導内容で、アとウは全員に共通する内容である。本研究では、この2つを取り上げ、目と手の協調と社会性を高める指導を行う。

表6 自立活動「流れ図」(A児を抽出)

学年・学部	A児					
障がいの種類・程度や状態等	○軽度精神遅滞、自閉スペクトラム症 ○新版K式発達検査 OS-M社会生活能力検査					
事例の概要	コミュニケーションスキルの向上を図り社会性を身に付ける指導、スムーズな身体の動きを高める指導					
実態把握	① 障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題等について情報収集 【長所・よさ】 ①基本的な生活習慣が身につけており、朝や帰りの準備等を自分でできる。 (以下省略。②収集した情報～へ整理)					
	【課題等】 ①言葉での説明を理解することが難しい。 (以下省略。②収集した情報～へ整理)					
	② 収集した情報(①)を自立活動の区分に即して整理する段階					
実態把握	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	①基本的な生活習慣が身につけており、朝や帰りの準備等を自分でできる。 ②時々お漏らしがある。	④図鑑を見るのが好き。興味のある生き物の名前をよく知っている。 ⑤ひらがなが定着し、カタカナや漢字も学習したいという意欲がある。 ⑥興味を持ったことは、続けて取り組むことができる。 ①忘れ物をすると不安で落ち着かなくなる。	⑦友だちが困っていることに気がつくことができ、優しくすることができる。 ⑧相手の気持ちや場の状況を理解することが苦手。 ⑨順番を守ることや待つことが苦手。 ⑩遊びのルールや勝敗の理解が難しい。	②活動の手順や見通しが持てることと自分で取り組むことができる。 ③時間や日付の概念理解が不十分。 ④文字を書き写すことが難しい。 ⑥場の状況理解が難しい。	⑤筆圧が強い。マスに字を入れて書くことや字形の整った字を書くことが難しい。 ⑥力加減の調節が難しい(消しゴムで文字をきれいに消す)。 ⑦縄跳びでリズムよく跳ぶことや曲に合わせて踊ることが難しい。 ⑧ボールを捕ったり、投げたりすることが難しい。(固有受容覚)	③休日にしたこと等を自ら話して伝えようとする。 ④人前で積極的に発表することができる。 ⑤言葉での説明を理解することが難しい。 ⑥会話のやりとりが難しい。
指導すべき課題の整理	③ ①、②をもとに整理した情報から課題を抽出する段階					
	●困った時の対応の仕方を身に付ける ●経験を重ねる中で、ルールを守る相手の気持ちを考えると社会性を育む ●自分の思いを相手に伝える力を高める ●聞く力を高める ●感覚(目と手の協調)や身体の動きを高める ●概念の形成(時間、日付等)・語彙の習得					
指導すべき課題の整理	④ ③で整理した課題同士がどのように関連しているかを整理し、中心的な課題を導き出す段階 (省略)					
	⑤ ④に基づき設定した指導目標(ねらい)を記す段階					
課題同士の関係を整理する中で今指導すべき指導目標として		コミュニケーションスキルの向上を図りながら、楽しく学校生活を過ごす社会性を身に付けることができる。 スムーズに身体を動かし、学習活動に取り組むことができる。				
⑥ ⑤を達成するために必要な項目を選定する段階						
指導目標(ねらい)を達成するために必要な項目の選定	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること	(2)状況の理解と変化への対応に関すること (3)障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること	(2)他者の意図や感情の理解に関すること (4)集団への参加の基礎に関すること	(2)感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること (4)感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握と状況に応じた行動に関すること (5)認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること	(3)日常生活に必要な基本動作に関すること (5)作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること	(2)言語の受容と表出に関すること (3)言語の形成と活用に関すること (5)状況に応じたコミュニケーションに関すること
⑦ 具体的な指導内容を設定する段階						
選定した項目を関連付けて具体的な指導内容を設定	ア ルールを守る相手の気持ちを考えると社会性を育む 【自立活動】 ・ソーシャルスキルトレーニング ・ルール性のある遊びや勝敗のある遊びで集団参加の手順や決まりを理解させる。 ・相手の気持ちを考える。 ・トラブルになった時は、言動を振り返り、課題を見いだしたり、具体的な目標を設定したりする。		イ 聞く力、自分の思いを伝える力を高め、困った時の対応の仕方を身に付ける 【自立活動】 ・目的に合わせて聞く活動。 ・目的に合わせて話す活動。 ・5W1Hを意識した話し方。 ・困った時の伝え方(対応の仕方)を状況に合わせて考える。		ウ 学習に必要な感覚や基本的技能の向上を図る 【自立活動】 ・感覚統合遊び ・ビジョントレーニング ・上肢下肢・手指機能の巧緻性を高める。 ・学習用具の使い方	
	【教科指導】 (全教科) ・ルールを守り、楽しく活動に参加する。		【教科指導】 (国語) ・目的に合わせて聞いたり、話したりする。(以下省略)		【教科指導】 (体育) ・技術の向上を目指して練習したり、ゲームを楽しんだりする。	
	【学校生活全般】 ・相手の気持ちを考えて発言する。(以下省略)		【学校生活全般】 ・声の大きさや話すタイミングに気をつけて話す。(以下省略)		【学校生活全般】 ・学習道具を正しく安全に使う。	
エ 概念の形成(時間、日付等)・語彙の習得 【自立活動】 ・概念の形成(位置、時間、色、形等) ・語彙や言葉概念を増やす。		【教科指導】 (全教科) ・教科学習を通して語彙や概念を増やす。		【学校生活全般】 ・行事を通して、時間の概念を身に付ける。		

2 授業実践

(1) 活動名「ボールを使って仲良く遊ぼう」

(2) 活動の目標

- ① 友だちとの関わり方、集団参加の手順やきまりを理解することができる。
- ② 目と手の協調した動き、手足の協調した動き、上肢の巧緻性を高めることができる。

(3) 指導計画（7時間）

	日時	活動内容
1～3	5月23、29、6月5日	トランポリン・ピンポンキャッチ・タオルキャッチ・新聞玉バスケット
4	【検証授業①】 6月7日(水) 2校時	ピンポンキャッチ・ボールリレー・新聞玉バスケットゲーム
5	6月14日(水) 4校時	ピンポンキャッチ・ルールの説明を考える・新聞玉バスケットゲーム
6	7月4日(火) 昼休み	※4年招待 ルールの説明・チームで話し合い・新聞玉バスケットゲーム
7	【検証授業②】 7月6日(木) 昼休み	※3・5年招待 ルールの説明・チームで話し合い・新聞玉バスケットゲーム

(4) 本時の指導（検証授業①）

① 目標

- ア 友だちと仲良く活動することができる。
- イ ボールをよく見て捕ったり、投げたりすることができる。

② 本時の工夫

- ア 目と手の協調を高めるために、ボールを投げる、捕る等のボールを使った遊びを取り上げ、体育の土台作りを図る。
- イ 授業の導入でそれぞれの遊びを通して高めたい力を伝え、児童へ意識させる（図1）。
- ウ 明確な目標を持って取り組むことができるよう、活動ごとに「できた」の基準を提示する（図2）。振り返りでは、基準と連動した振り返りシートを活用し、効果的な振り返りができるようにする。
- エ 個々の実態に応じて、道具や距離等の環境を調整することで、安心した気持ちで活動に参加できるようにする。



図1 高めたい力

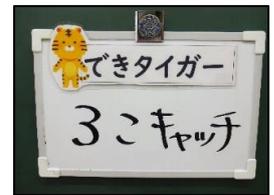


図2 「できた」の基準(例)

③ 本時の展開

段階	学習活動と内容	ねらい・支援	評価
導入 5分	1 はじめのあいさつをする。 2 活動内容とめあてを確認する。 めあて ①よく見て捕ったり、投げたりしよう。 ②友だちと仲良く活動しよう。	・仲良く活動するための「約束」を確認する。 <i>やくそく</i> 1. ルールをまもる。 2. ともだちにやさしくする。 3. すぐにあきらめない。 4. まけてもおこらない。	
展開 30分	3 ピンポンキャッチ（目と手の協調運動） ・ピンポン玉をカップでキャッチする。 4 ボールリレー（目と手・固有覚） ・全員でボールを投げる、捕るリレーをする。 5 新聞玉バスケットゲーム（上肢の巧緻性・固有覚・集団参加） ・新聞玉を投げて点数の書かれた入れ物に入れ、得点を競い合う。 	・カップで玉を受け止めるときの身体の動きに気を付けさせる。 ・投げるときは、相手が捕りやすいように投げることを意識させる。 ・玉を集めたり、点数を数えたりと協力して活動できるように具体的に声をかける。	ア ボールをよく見て捕ることができたか。 イ 相手が捕りやすいように投げることができたか。 ウ 玉を投げて入れ物に入れることができたか。 エ 友だちと仲良く活動できたか。
終末 10分	6 学習活動を振り返る。 ・今日の学習でできたこと、難しかったこと、次に頑張りたいこと、友だちの良かったところ等を発表する。	・「できた」の基準を確認しながら、振り返りシートを記入させる。	

④ 評価（個別の評価より一部抜粋：目標イ）

（A：十分満足できる状況 B：おおむね満足できる状況 C：支援が必要）

	A	B	C
A児 B児 D児 E児	カップを使って玉を捕ることができた。（4個以上）	カップを使って玉を捕ることができた。（3個）	カップで玉を触ったり、カップを使って玉を捕ったりすることができた。
C児 F児 G児	カップを使って玉を捕ることができた。（7個以上）	カップを使って玉を捕ることができた。（4～6個）	カップを使って玉を捕ることができた。（3個以下）

⑤ 成果と課題

ア 成果

- ・授業の導入でそれぞれの遊びを通して高めたい力を伝え、黒板に表示したことで、児童は、自分の課題と関連する活動の目的を意識して取り組むことができた。
- ・活動ごとに「できた」の基準を示したことで、児童は目標を持って活動に取り組むことができた。また、振り返りにおける「できた」の実感にもつながった。

イ 課題

- ・自力での振り返りシート記入が難しい児童がおり、個の実態に応じた振り返りシートの工夫が必要である。
- ・否定的な言葉の発言、自己中心的な行動が見られる児童や、他者の活動に関心を向けず、友だちとの関わりが十分にできない児童がいた。応援する言葉をかけながら仲良く活動できるようにする等のソーシャルスキルを高めることが必要である。
- ・評価項目が多く評価が難しかった。次の授業では、項目を絞り込む必要がある。

(5) 本時の指導（検証授業②）

① 目標（個別の目標）

<p>ア 友だちとコミュニケーションをとることができる。</p> <p>○言葉で自分の考えを伝えることができる。（A児）</p> <p>○友だちの話聞きながら、うなずきや動作等で自分の思いを伝えることができる。（B児・E児・F児・G児）</p> <p>○友だちの話聞きながら、言葉で自分の考えを伝えることができる。（C児・D児）</p>
<p>イ 友だちを応援しながら仲良く活動することができる。</p> <p>○声掛けがあると、応援の言葉をかけながら、仲良く活動することができる。（A児・E児・G児）</p> <p>○応援の言葉をかけながら、仲良く活動することができる。（B児・C児・D児・F児）</p>

② 本時の工夫

ア 招待する友だちは本学級の児童が選ぶ。口頭で友だちを誘うことが難しい児童もいるため、招待状（図3）を作成し渡すことで友だちへの働きかけが行いやすいようにする。

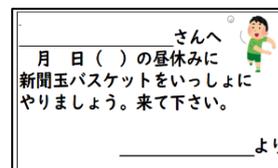


図3 招待状

イ ルール説明は、本学級の児童が行い、交流学級児童が本学級児童のできるところ、頑張っているところに気づけるようにする。

ウ 順番とチーム名を話し合う活動を設け、意図的に同じチームの友だちとのコミュニケーションや関わりが持てるようにする。

エ 応援することに意識が高まるよう、児童が考えた「応援の言葉」を黒板に掲示する（図4）。また、特に支援が必要な児童については、応援の言葉や応援することの意義を個別に確認する。

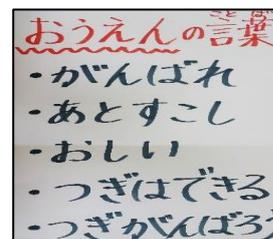
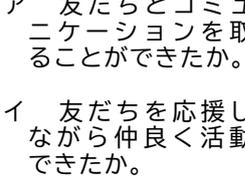


図4 応援の言葉(掲示)

③ 本時の展開

段階	学習活動と内容	ねらい・支援	評価
導入 5分	1 はじめのあいさつをする。 2 活動内容とめあてを確認する。 めあて ①箱をねらって玉を投げよう。 ②友だちを応援しながら仲良く活動しよう。	・見通しを持たせ、安心して活動に臨めるようにする。 ・それぞれの活動が何のトレーニングになっているのか意識させるようにする。	 ルール説明
展開 20分	3 ルールの説明をする（話す） ・支援学級児童が新聞玉バスケットのルールを説明する。 4 チームで話し合う（コミュニケーション） ・投げる順番とチームの名前を考える。 5 新聞玉バスケットゲーム （上肢の巧緻性・固有覚・集団参加） ・新聞玉を投げて点数の書かれた入れ物に入れ、得点を競い合う。	・新聞玉バスケットのやり方を聞く人に分かりやすく説明する。 ・3人で話し合っ決めてられるようにする。 ・「約束」を確認し、仲良く活動できるよう意識させる。	 ア 友だちとコミュニケーションを取ることができたか。 イ 友だちを応援しながら仲良く活動できたか。
終末 5分・ 15分	6 学習活動を振り返る。 ・感想を発表する。 (交流学級児童が帰った後) ・今日の学習でできたこと、難しかったこと、友だちの良かったところ等を振り返り、発表する。	・支援学級児童の良さに気づけるようにする。 ・「できた」の基準を確認しながら、振り返りシートを記入させる。	 話し合い

④ 評価（個別の評価より一部抜粋：個別の目標ア）

(A：十分満足できる状況 B：おおむね満足できる状況 C：支援が必要)

	A	B	C
A児	友だちの話を聞きながら、言葉で自分の考えを伝えることができた。	言葉で自分の考えを伝えることができた。	声掛けされると、話し合いに参加することができた。
B児 E児 F児 G児	友だちの話を聞きながら、言葉で自分の考えを伝えることができた。	友だちの話を聞きながら、うなずきや動作等で自分の思いを伝えることができた。	声掛けされると、うなずきや動作等で自分の思いを伝えることができた。
C児 D児	自分の考えを伝えながら、話し合いを進めることができた。	友だちの話を聞きながら、言葉で自分の考えを伝えることができた。	うなずきや動作等で自分の思いを伝えることができた。

⑤ 成果と課題

ア 成果

- ・本学級の児童が、自信を持ってルールの説明を行うことができた。
- ・めあてや「応援の言葉」の確認と掲示で、友だちの活動にも関心を向け、応援やアドバイスをを行いながら主体的に活動に参加する様子が見られた。
- ・個の実態に応じた振り返りシートを用意したことで、教師の支援がなくても自分で記入できる児童が増えた。

イ 課題

- ・休み時間に少人数で行った「招く交流」であったが、充実した交流及び共同学習としていくためには、本時のみで終わるのではなく今後につなげていくことが必要である。

IV 仮説の検証

仮説1 自立活動の指導において、個のニーズに応じた感覚統合遊びを行うことにより、「できた」喜びや「できる」自信を積み重ね、自己効力感を育むことができるであろう。

本学級児童に共通する課題である文字を書き写すことやボールを使った運動、友だちとの関わりが苦手という実態をもとに、自立活動で固有覚と目と手の協調した動き、コミュニケーションや集団参

加の力を高めることをねらいとした感覚統合遊びに取り組んだ。感覚統合遊びを通して自信や成功体験を積み重ね、自己効力感を育むことができたかについて検証を行う。

1 「できた」喜びと「できる」自信

(1) 個に応じた活動

個に応じた教具の工夫や活動の難易度をスモールステップにすることによって、児童は「できない」「難しい」と諦めることなく意欲的に取り組むことができた。児童はそれぞれに達成感や成功体験を得ることができたと考える。

(2) 目標達成の視覚化

児童が「できるようになっていること」「上手になっていること」を実感できるよう感覚統合遊びにおける達成度を視覚化した(図5)。表を指差しながら回数が増えたことを嬉しそうに報告する児童や、次の目標を目指して頑張ろうとする児童、友だちと互いに褒めたり、励まし合ったりする様子が見られ、できていることの実感と自信につながったと考える。

回数	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
1	●	●	●	●	●
2	●	●	●	●	●
3	●	●	●	●	●
4	●	●	●	●	●
5	●	●	●	●	●

図5 目標達成の視覚化

(3) 感覚統合遊びにおける変容

感覚統合遊びの継続した取り組みで、児童は必要な感覚を使いながらスムーズに動けるようになってきた。教師の支援としては、前回よりできていることを具体的に伝え、児童が「できた」「できる」をより実感できるようにした。表7は活動当初とその後の変容をまとめたものである。ピンポンキャッチはコップ等で捕れた数を、新聞玉バスケットは箱に入った玉の数を表している。どの児童も動きにレベルの向上が見られ意欲的に活動に取り組んでいた。

表7 ピンポンキャッチと新聞玉バスケットの変容

	ピンポンキャッチ (10個中捕れた数)			新聞玉バスケット (10個中入った数)		
	5月23日	6月7日	6月14日	6月5日	6月14日	7月4・6日
A児	1個(バケツ)	3個(入れ物大)	6個(入れ物大)	2個	1個	7個
B児	10個(バケツ)	4個(入れ物大)	4個(コップ)	2個	3個	4個
E児	8個(バケツ)	4個(入れ物大)	4個(コップ)	1個	2個	4個

(4) 児童同士の教え合い

感覚統合遊びに取り組む中で、児童自らピンポン玉の取り方や新聞玉の投げ方のコツ等を友だちに教える場面が見られるようになった(図6)。児童同士がお互いに教え合う姿から、動きが上達したことに自信をつけてきたことが分かる。



図6 友だちへのアドバイス

(5) 「できた」の基準と振り返りシート

活動ごとに目標を提示し(図2)、振り返りと連動させたことで、基準と実際の活動を照らし合わせて振り返りを行うことができた(図7)。児童は「できた」ことを実感し、自信を持つことができたと捉える。

以上のことから、自立活動において個の実態やニーズに応じた感覚統合遊びに継続して取り組むことは、スムーズな動きの獲得や自信につながり、教え合いへと広がりも見られ、活動への意欲的な姿勢や自信が窺える言動からも自己効力感を育むことができたと考える。

ボールをつかってなかよくあそぼう		6月7日		
名前()				
1	ピンポンキャッチ	◎	○	△
2	ボールリレー	◎	○	△
3	しんぶん玉バスケット	◎	○	△
4	ともだちとなかよくする	◎	○	△

3ことれた。うれしい。 子ボールリレー
さんことれたさん

図7 振り返りシート

仮説2 「招く交流」において、自信をつけた感覚統合遊びを取り入れることにより、主体的に参加し、自己効力感を育むことができるであろう。

自立活動において、本学級児童の課題に応じた感覚統合遊びに継続して取り組んできたことで、苦手な動きにも改善が見られ、自信がついてきた。そこで、交流学級の友だちと一緒に過ごす休み時間に、自信を持って取り組めるようになった感覚統合遊びを取り入れることで、主体的に参加し、自己効力感を育むことができたかについて検証を行う。

2 活動への主体的な参加

(1) ルールの説明（発表）

ルール説明を本学級児童が行った（図8）。初めて行う友だちにも分かりやすいよう掲示資料を作成し、説明では聞きやすい声の大きさを意識して伝えていた。

(2) コミュニケーション

本学級児童もチームでの話し合いに参加し、自分の意見を伝えていた。対話を通して3人で意見をまとめることができ、どの児童も良い表情で会話する様子が見られた（図9）。

(3) 応援とアドバイス

友だちが投げる際には、積極的に「頑張れ」「おいしい」等と大きな声で応援の言葉をかけていた。同じチームの友だちだけではなく、他のチームの友だちも応援する姿に活動への意欲と自信が窺えた。また、同じチームの友だちが投げる際には、「上から投げたらいよいよ。」等、お手本を見せながらアドバイスを行う児童もいた（図10）。

3 交流学級児童の感想を聞いた児童の姿

「招く交流」に参加した交流学級児童が書いた感想を本学級児童に紹介した。以下は感想の一部である。

- ・「〇〇さん（支援学級児童）が投げ方を教えてくれたので上手く投げることができた。支援学級の友だちは高い点数を取ってすごい。」
- ・「発表が上手で分かりやすかった。発表しているところを初めて見て、おどろいた。」

交流学級児童の感想を聞いて、本学級児童は、「友だちが来てくれて嬉しかった。」「友だちに教えることができた。」「大きい声で発表ができた。」「またやりたい。」等と感想を述べており、喜びや自信、達成感が窺えた。

友だちからの感想は本学級児童の自己効力感を更に高めたと考える。

以上のことから、交流学級の友だちと一緒に過ごす休み時間において、安心できる環境で自信を持って行える遊びであれば、本学級児童も主体的に参加して友だちと一緒に楽しむことができていた。自信を持って活動する様子や児童の感想から、自己効力感を育むことができたと考えられる。



図8 ルール説明の様子



図9 話し合いの様子



図10 友だちへアドバイス

V 考察

全ての授業を終えた後、7月に2回目のGSESC-Rと、本学級児童及び交流学級担任へ交流学級での様子や過ごし方について聞き取りを行った。

1 児童用一般性自己効力感尺度（GSESC-R）

5月に行った結果（表3）と比較すると、「非常に低い」と「低い傾向にある」に位置する児童が減り、「高い傾向にある」「非常に高い」に位置する児童が増えており、自己効力感の向上が見

られた（表8）。変化が見られない児童や安心感が低下した児童については更なる指導の工夫が必要である。

質問項目別では、表9の3つの項目で自己効力感の高い回答をした児童が大きく増えていた。児童の活動への意欲や自信が高まっていると考える。

表8 GSESC-Rの結果（令和5年7月実施）※G児未実施

	安心感	チャレンジ精神	自己効力感（総合得点）
非常に高い		A児	
高い傾向にある	A児、E児、F児	B児、E児、F児	A児、E児、F児
普通	C児、D児、	D児	B児、C児、D児
低い傾向にある	B児	C児	
非常に低い			

表9 変容が見られる質問項目

	項 目	5月	7月
10	やりたくないことでも、一生懸命やる。（はい、どちらかといえばはい）	2人	6人
16	目標を立てても、その通りにできない。（いいえ、どちらかといえばいいえ）	1人	6人
18	自分は結構できるんだと思っている。（はい、どちらかといえばはい）	2人	6人

2 児童及び担任への聞き取りから

児童と交流学級担任への聞き取りから、友だちとの関わりが増え、各種活動においても意欲的に取り組む姿勢が見られるようになったことが分かる（表10）。

表10 聞き取りの内容（一部抜粋）

本学級児童	交流学級担任
<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの名前を覚えた。 ・交流学級の授業や集まりに行くことが嫌ではない。 ・休み時間に時々、交流学級の友だちと遊んでいる。 ・交流学級の友だちと話をするようになった。 ・体育の体操をみんなと一緒にやっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの名前を呼んで、自分から関わろうとする様子が見られるようになった。 ・体育で苦手な活動もできる形で参加している。 ・給食や掃除の当番活動を友だちと一緒に頑張っている。

本研究では自己効力感を高めるための学習活動の工夫として、自立活動において苦手さの改善をねらいとした感覚統合遊びを行った。特に、児童の課題である目と手の協調と社会性を高めるために、ボールを使った遊びに取り組んだ。児童は、感覚統合遊びの継続した取り組みや「できた」を実感できる指導と教具の工夫により、苦手な動きに改善が見られるようになり、「できた」喜びと自信を積み重ねることができたと考える。それは、毎時間の振り返りシートにて検証することができた。また、休み時間の「招く交流」において、自信を持って取り組める遊びを取り入れたことによって、安心感と自信を持って主体的に参加する様子が見られた。GSESC-Rと児童本人及び担任への聞き取りからも自信がついたことによる変化が窺える。

これらのことから、自立活動の視点を踏まえ、苦手さの改善をねらいとした感覚統合遊びに取り組むことは、児童の自信や成功体験につながり、自己効力感を育むことや学校生活の充実を図ることに有効であると考えられる。

VI 成果と課題

1 成果

- (1) 個のニーズに応じた感覚統合遊びに継続して取り組むことで、ボールを投げる、捕る等、それぞれの苦手な動きがスムーズになり、自信や自己効力感を育むことができた。
- (2) 「招く交流」では、自信が持てる活動に主体的に参加することができた。また、交流学級の友だちとの関係が親密になり、交流学級への行き渋りが減った。

2 課題

- (1) 児童の苦手さの改善・克服のためには、今後も継続して感覚統合遊びを取り入れつつ、聞く活動やソーシャルスキルトレーニング等を行い、学習面・生活面の基盤を高めていきたい。
- (2) 「行く交流」においても主体的に参加できるよう今後も自己効力感を育む指導が必要である。

〈参考文献〉

佐藤慎二・向野紀子・森英則 2021 『今日からできる！小学校の交流及び共同学習 障害者理解教育との一体的な推進をめざして』 ジアース教育新社

菅原眞弓・廣瀬由美子 2021 『特別支援が級をはじめて担任する先生のための〈自立活動〉授業づくり』 明治図書

文部科学省 2018 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）』 開隆堂出版

鴨下賢一・池田千紗・小玉武志・高橋知義 2017 『発達が気になる子の脳と体をそだてる感覚あそび』 合同出版

佐藤和美 2015 『感覚統合を生かしたたのしい教室づくり』 かもがわ出版

木村順 2014 『保護者が知っておきたい 発達が気になる子の感覚統合』 学研

中尾繁樹 2013 『「特別」ではない特別支援教育⑤不器用な子どもたちの感覚運動指導』 明治図書

福井至・飯島政範・小山繭子・中山ひとみ・小松智賀・小田美穂子・嶋田洋徳・坂野雄二 2009 『児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度（GSESC-R）』 ころネット株式会社

佐藤和美 2008 『たのしくあそんで感覚統合 手づくりのあそび100』 かもがわ出版

坂野雄二・前田基成 2002 『セルフ・エフィカシーの臨床心理学』 北大路書房

祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊 1985 『社会的学習理論の新展開』 金子書房

〈参考 Web サイト〉

文部科学省 2019 『交流及び共同学習ガイド』

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/1413898.htm（最終閲覧 2023 年 6 月）

文部科学省 初等中等教育分科会 2012 『共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）』

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm（最終閲覧 2023 年 6 月）

STUDY HACKER こどもまなび☆ラボ 「子どもの自信がぐんぐん育つ！学力の高さと比例する「自己効力感」をあげる方法」

<https://kodomo-manabi-labo.net/jikokouryoku-takameru>（最終閲覧 2023 年 6 月）

山本泰寛 2012 年「算数科の学習が自己効力感に与える影響の一考察—小学校 4 年「わり残の筆算」の単元を通して—」

https://soka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=37833&item_no=1&page_id=13&bloc（最終閲覧 2023 年 6 月）